

関西学院大学 研究成果報告

2018年5月3日

関西学院大学 学長殿

所属： 文学部
職名： 教授
氏名： 桂田恵美子

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	乳幼児の愛着に関する研究
研究実施場所	関西学院大学個人研究室
研究期間	2017年 4月 1日 ～ 2018年 3月 31日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

授業の一環として、乳児の愛着パターンを判定する方法であるストレンジ・シチュエーション法（SSP）を用いて地域の母子を対象に実験を行い、これまで100組以上のデータを蓄積してきた。このSSPは愛着研究において世界的に使用されている愛着パターンの評定方法である。しかし、これらのデータは一部卒論や修論などに使われることはあっても、ほとんどのデータのコーディング（判定）には手が出ない状態であり、データは眠ったままであった。そこで、この特別研究期間を利用して、これまで蓄積されたデータをコーディングするという計画を立てた。その為、アメリカのミネソタ大学で毎年行われているSSP研修に一週間参加し、コーディングについての認識をリフレッシュした。

また、この特別研究期間中に、蓄積されたSSPのデータを生かした「乳幼児の愛着パターンと適応－問題行動や向社会行動に焦点を当てて－」という研究が日本生命財団の受託研究として認められ、助成金をいただいた。この研究は1歳時に測定された愛着がその後の適応と関連しているかどうかを実証的に検討することを目的する縦断研究である。そのため、これまでSSPの実験に参加した母親に連絡を取り、研究協力に同意した母親に子どもの問題行動、思いやり、共感性、社会性などから成る質問冊子を送付し、現在の子どもの適応について回答してもらった。特別研究期間中に、これらのデ

ータ収集と入力は終了している。今後、1歳時の愛着パターンを判定し、それらの関連を分析して行くという過程が残っている（この受託研究期間は2018年9月まで）。

SSPの判定には子どもが親に接近したり、接触したりという要素が大きな意味を占める。そのため、親と子の間だけではなく、その他の人間関係においても接触の持つ意味は大きいと考え、タッチやマッサージ（所謂スキンシップ）の心理的効果に関する研究にも取り組んでいる。その研究の一環として、特別研究期間中にタッチやマッサージについて興味・関心を共有する他の研究者と一緒にスウェーデンに在住するタッチの生理学的研究で有名なDr. Moberg氏を訪問し、タッチについての生理的効果（オキシトシン）についてのお話を伺った。また、そのついでにマッサージをカリキュラムとして取り入れているスウェーデンの幼稚園や小学校を訪問した。実際に幼稚園児がお互いに、あるいは先生からマッサージを受けているところを観察し、また、そのポジティブな効果を感じている先生方の話を聞き、より実証的にこのマッサージの効果を検証する必要があると考えた。そこで、今後日本の幼稚園等においてマッサージをカリキュラムに取り入れて、その効果を検証するという研究を計画している。その研究の手始めとして、大阪で開催されたハプティックセラピーの講習会に参加し、背中マッサージのやり方を学んだ。その後、一緒に参加した研究者と共同でそのやり方のビデオを作成した。今後、このビデオを使って研究を進展させて行きたいと考えている。

特別期間中の研究成果としては、英語論文”A study of associations among attachment patterns, maltreatment, and behavior problem in institutionalized children in Japan”が「Child Abuse & Neglect」という学術雑誌に掲載されたことがあげられる。この研究は、児童養護施設で暮らす幼児の愛着と被虐待経験や問題行動の関連を検討したもので、愛着についてはドールプレイを使用し愛着表象パターンを測定した。結果は、入所理由が虐待であった幼児の愛着表象は混乱型が圧倒的に多く、問題行動得点も高かったというものであった。この研究に参加した子どもたちが中・高校生となった現在、本年度（2018年度）科研費の助成を受けて追跡研究を行う予定である。その他、「育児放棄と性役割観」という表題の論文を書きあげ「日本ジェンダー研究」に、“A pilot study on the effect of massage on stress in Japanese female university students”という表題の英語論文を「Archives of Women’s Health」という学術雑誌に投稿した。これらは現在、レビュー中である。

期間中の学会発表（ポスター）は以下の通りである。

“Attachment patterns and the quality of interactions between children and care-workers in Japanese institutions,” at 2017 SRCD Biennial Meeting, Austin, Texas, USA (2017, 4)

「対子ども効力感尺度の作成」と「児童養護施設における個別学習支援プログラムの効果検証—児童および大学生の変化の関連—」, 於日本教育心理学会第59回総会, 名古屋国際会議場 (2017, 10)

「1歳児の愛着は1年後、2年後の問題行動を予測するか」, 於日本発達心理学会第29回大会, 東北大学 (2018, 3)

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。